

令和元年6月13日現在

機関番号：25406

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02129

研究課題名(和文) 対話と真理 ソクラテスの探求方法の再検討

研究課題名(英文) Dialogues and Truth - the Socratic Method of Searching Reexamined

研究代表者

大草 輝政 (Ohkusa, Terumasa)

県立広島大学・私立大学の部局等(庄原キャンパス)・准教授

研究者番号：10552705

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、とりわけいわゆる想起説の文脈において、ソクラテスの探求方法の意義を再評価した。

まず『メノン』『パイドン』『パイドロス』といった対話篇の精査をおこない、またその他の作品が、想起説とどのような関係にあるのかを考察した。主な研究成果としては、プラトンのいわゆる発展的解釈 - プラトンの執筆年代に応じて、プラトン思想が発展したというもの - には、基本的問題があると確認したことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的意義としては、第一に、プラトン哲学のまだ十分究明されていない問題に光を当てたことである。すなわち、従来想起説やイデア論など、プラトン中期のみ(あるいは中期以降)の思想であるなどと限定的に捉えられがちだったものが、「対話」という探求方法を支える想定として、初期対話篇から後期対話篇に至るまで広範に一定の仕方で機能している可能性 - つまり想起説やイデア論が一見不在と思われる対話篇も含めて - の解明を進めた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to reevaluate the relevance of the Socratic method of searching especially in the context of the so-called theory of recollection. I firstly undertook an examination of the main texts, Plato's Meno, Phaedo and Phaedrus. I also explored to what extent the other works of Plato might be related or unrelated to the theory. One of the main results of this research was that I uncovered fundamental problems within the developmental view (Plato's works show a 'development' of his thought).

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：想起説 イデア論 探求方法 非発展的解釈 文脈依存性 知覚 思い 知識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来型の有力プラトン解釈においては、プラトン作品は対話篇執筆年代によって、概ね初期・中期・後期の三期に区分され、プラトンの思想内容も、初期から後期へと批判的に「発展」したとされる。それに対して、近年そうした「区分」や「発展」そのものに疑義を呈する議論も提示され始めている。プラトン研究に見直しの気運が高まりつつある今日の状況において、プラトン哲学の骨格に関わるような内容 — アイデア論や真理探究のための方法論 — については、最新の研究動向を踏まえた、原典精査に基づく再検討が必要である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、プラトン作品に描かれるソクラテスの真理探究の方法がどのようなものであるかを明らかにするとともに、現代におけるその哲学的意義を新たに発掘することである。特に次のような点に重点を置いて研究が推進される。

- (1) ソクラテスの探求方法の様々な候補 — 「吟味・論駁」「仮設法」「分割と総合」「対話法」等々については、プラトン思想の変遷を映し出す、異なる探求方法であると捉えられる傾向にあった。しかし本研究では、それぞれがどのような関係にあり、どのような役割を果たしているのかを探り、むしろそれらの相補性を浮かび上がらせる仕方で考察を進める。
- (2) 「もろもろの事物に関する真実がつねに魂の中にあるのだとすれば……」(『メノン』86b) といった表現に見られる真理観を手がかりに、ソクラテスが問答によって真理を探究したことの意義、さらにまたプラトンが対話篇形式で執筆したことの意義を究明する。
- (3) ソクラテスの探求方法と、アイデア論の親和性を明らかにし、ソクラテスとプラトンを対比的に捉えようとしてきた従来型の有力プラトン解釈とは別の角度から新たな光を当てる。

3. 研究の方法

本研究代表者は、当該研究に関連するいくつかの研究を行ってきた。例えば、プラトンの初期作品に描かれるソクラテスの探求方法(吟味・論駁)と、いわゆる「想起説」とが、探求手続き上一体的なものであることを明らかにしてきた。すなわち、吟味・論駁は、もともと想起説的な想定に依拠した上で行使されているのであり、「初期対話篇では吟味・論駁を、中期以降では想起説を、プラトンはそれぞれ探求方法として支持している」といった従来型解釈に対しては、疑義を呈することになった。本研究はこの延長線上に位置づけられ、様々な従来型解釈にさらなる見直しを迫ろうとするものである。

具体的には、次のように研究が進められる。

(a) 「吟味・論駁」「仮設法」「分割と総合」「対話法」といった、折々に異なる呼称で登場する探求方法について、プラトン自身がどのような文脈で、どう提示しているのかを、関連テキストの精査によって浮かび上がらせ、とりわけそれらの探求方法の相補性について究明する。

(b) 想起の主体を「哲学者」、想起の対象を「アイデア」に限定するような一有力解釈に対してもさらなる見直しを迫っていく。

(c) 問答によって真理を探究するソクラテス像と、アイデア論との間には、親和性があることを究明する。本研究代表者はこれまでに、「想起説は中期以降の思想だとは言えない」と論じてきた。想起説とアイデア論の相補性の解明がさらに進めば、「アイデア論もまた、プラトン中期以降の思想だとは言えない」との論点が浮かび上がってくると予想される。

(d) 以上(a)~(c)の当然の帰結として、ソクラテスの真理探究は、アイデア論や想起説によってこそ、適切に有効な認識論的下支えを得るとの予想が立つ。もしそうであれば、ある対話篇に想起説への明示的な言及があるか否か、あるいはアイデア論への明示的な言及があるか否かは、必ずしもプラトンの思想発展を反映するものではないことにもなるだろう。そして「対話」という営みと真理の関係、問答に徹するソクラテスの探求方法、さらにはプラトンが対話篇形式で執筆したこと自体にも、従来型の解釈には見られなかった積極的意義を見出せるのではないかと考えられる。

4. 研究成果

研究代表者は、つぎのような研究成果を得た。

- (1) 20世紀後半にピークを迎えたいわゆるプラトンの「発展的解釈」は、このたび参照し得た二次文献や、あるいは海外の研究者たちとの意見交換から、予想通り、見直しの時期に入っていることが再認識された。実際プラトンのテキストからも、「発展的解釈」の孕む問題点は様々に指摘可能である。例えば、『メノン』『パイドン』『パイドロス』に現れる「想起説」が、(認識論の大々的な展開を見る)『国家』において不在なのは何故か。そこに「想起説」の単純な批判・放棄を読み取るのは、色々な理由から困難である。だとすればわれわれはそれぞれの対話篇の文脈をこそ、より注意深く探らなければならないと言えると同時に

に、対話篇を横断的に捉える視点、より有機的なプラトン理解も、むしろ積極的に求められているといった可能性も浮上しよう（この手の解釈として、Kahn, Ch., “On the Philosophical Autonomy of a Platonic Dialogue: the Case of Recollection” in Michelini, Ann N.ed.,(2003) *Plato as Author: The Rhetoric of Philosophy*, Brill. は、参考になる）。「対話篇における想起説不在や、イデア論不在は、それらの批判・放棄を意味せず、また執筆順の決定にも特に影響しない」という本研究の論点は、例えばこうした仕方で確認されうる。

- (2) 「つねにものごとの真理が魂の内にあるなら……」（『メノン』86b）という表現は、「想起説」の可能性や、さらには対話的探求の可能性を、強く支持する一節であると言える。そして、そのときの「魂」とは、「哲学者の魂」などと限定されることはなく、『メノン』では、呼び出される召使も任意性を保っていること（82ab）しかも召使は幾何を習っていない（85d）との確認がなされていることも、想起の主体や対象を考える上で重要である。このようにして、想起の主体や対象が、厳しく限定される必要は無いという点の再確認がいくつか行われた。
- (3) さらに知覚の想起性について調査が行われた。そのために、『メノン』『パイドロス』『パイドロス』の関連箇所を検討がなされたが、「想起説」が明示的に語られない『国家』や、さらには、当初計画では予定されていなかった『テアイテトス』第一部の検討も必要となった。可能なかぎり、各対話篇を個々に独立のものとして扱う視点と、諸対話篇を横断的に見る視点とを同時に保ちながら、上記四作品の異同を点検し、とりわけ「見たり、聞いたり……」といった基本的認識の局面における想起発動の有無を考察した。結果、この四作品においては、知識と感覚の対象はあくまで異なるという言い方もできるかもしれないが、緩やかな繋がりとあると言える余地もあり、現段階においては、イデア論や想起説に関するかぎり、知覚、思い、知識といった局面で、対話篇を横断的に、ある種一枚岩的とも言えそうな想起説解釈を追究している。
- (4) ソクラテスの探求方法に関しては、「人間がものを知る働きは、人呼んで<実相>（エイドス）というものに則して行わなければならない、すなわち、雑多な感覚から出発して、思考の働きによって総括された単一なるものへと進み行くことによって、行わなければならない……」（『パイドロス』259bc, 藤澤訳）といった一節が、プラトンの知覚論、知識論等も含めて理解するための、ある集約的な表現の一つであると考えられる。今後、様々な対話篇と、この一節との繋がりを見極めていく必要があり、テキストの検討を開始した。なお、(3)のように『テアイテトス』の検討も含め、当初予定よりも検討範囲がかなり広がりとつある本研究は、とりまとめの機会を先に延ばしてしまっている点は否めない。が、その一方で、当初予定よりも多くの対話篇、より広範な文脈を、統一的に論じる視点を見出しつつある。
- (5) これらを踏まえた『メノン』の新訳作成および推敲、また訳註・注解の作成も進めており、遠からず京都大学学術出版会より公刊を予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

なし

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
なし

ホームページ等

6 . 研究組織
研究代表者
大草 輝政（OHKUSA TERUMASA）
県立広島大学・総合教育センター・准教授
研究者番号：10552705

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。